

# 胃がんロボット支援手術

## 北大病院 消化器外科II 保険診療スタート

北大病院(宝金清博院長・944床)の消化器外科II(科長・平野聡消化器科学教室II教授)は、2018年度診療報酬改定で保険収載された胃がんに対するダ・ヴィンチ(手術支援ロボット)を用いた腹腔鏡下手術の施設認定を道内で初めて取得し、保険診療を開始した。従来の腹腔鏡下手術よりも確実で安全なリンパ節郭清や消化管再建等を実施でき、術後合併症も減らせる。これまで大学による校費負担で19例実施してきたが、保険診療としては16日現在、既に2例を実施した。



今次改定では、ロボット支援手術の保険収載が

これまでの腎がんと前立腺がんに加え、胃がん、肺がん、食道がん、直腸がん、膀胱がん、子宮がんなどの計12術式に大幅拡大された。胃がんは幽門側胃切除術、胃全摘術、噴門側胃切除術の全てで保険診療が可能となっている。

保険収載に先立ち、先進医療Bとして実施されたロボット支援腹腔鏡下胃切除術の総括報告書

「Clavien-Dindo

分類でグレードIII以上の比較的重い術後合併症発症率は2・45%。従来の腹腔鏡手術のヒストリカルデータが6・40%に比べて有意に低く、安全性に優れることが示された(9・0・0018)。同大病院で施行した約20例においても同様の感触を得ている。

手術支援ロボットは10〜15倍の拡大視効果を有する3次元画像下で、脾臓や静脈、リンパ節等を

グ機能によって、手ぶれせず自由で超精密な鉗子操作が可能という。出血量も少なく、その結果として術後合併症も減らすことができる。

ロボット支援手術は09年11月に薬事承認、12年4月から前立腺全摘術に加算が新設され、適応拡大とともに普及が進んでいる。北大病院は13年4月に導入し、主に泌尿器科領域で稼働していた。ロボット支援腹腔鏡下胃切除術を保険診療で行う施設基準としては、▼胃がん手術が年50例以上▼うち腹腔鏡下胃切除術が年20例以上▼術者のロボット支援手術経験10例以上が求められる。消化器外科IIでは海老原裕

磨特任講師を中心に手術を担当、患者の既往や癒着等を慎重に考慮しつつ適応を広げ、年20〜30例を見込んでいる。平野教授は「革新的技術によって、手術が変わる。今後も適応を広げながら、安全で確実な手術を遂行していきたい」と話し、食道がんに対するロボット支援手術の保険診療実施を目指す。同病院の他診療科でも、肺がん、大腸がん、子宮がんなどに対する導入準備が進められている。